

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 田口 麻奈

本論は、戦後詩の始発期に中心的な役割を果たした詩人、鮎川信夫の詩と評論を詳細に分析することによって、あらためて現代詩の思想的可能性を検証したものである。

構成は研究史を概括した序論と、鮎川信夫を論じた第一部、さらに、鮎川ら「荒地」派の文学史的意義を考察した第二部からなる。第一部第一章においては、鮎川の代表作「死んだ男」に関して、戦死した友人へのレクイエムとみる従来の解釈を退けた上で、逆に戦死者を代行することの不可能を示すことによって、戦後社会に積極的に向きあおうとした点を評価し、これまでの鮎川像の大胆な見直しを求めている。第二章「『兵士の歌』論」においては、同時代の「死の灰詩集」論争を視野に、詩に安易に政治的メッセージを託す志向を排し、単独に徹することによって外部との融和を模索しようとする、鮎川独自の文学観を導き出している。第三、第四章では〈病院船詩篇〉を扱い、〈病院船〉を過去の戦争体験の形象とみる立場を排し、それが戦中ではなく、戦後日本の比喻であること、また、原罪のイメージを媒介に国家と個人の相互規定的な関係が模索されていること、さらに戦争が過去の記憶としてではなく、現在なお主体を宙づりにする「継続感覚」として描かれていること、などの点を積極的に評価している。第五章「『小さいマリの歌』論」では、私生活を扱った抒情詩であるというこれまでの解釈に対して、むしろ抒情を排し、自然と精神との乖離を前提とする「考える詩」を提唱したところに新たな提案があることを指摘している。鮎川が伝統的な抒情への傾斜や政治的メッセージの表出を慎重に忌避しつつ、個人と共同体のいずれをも前提とせぬ第三の世界を模索し、なおかつ戦後の現実にあくチュアルに対峙しようとしていたという第一部の主張は、いずれも従来のこの詩人像の修正を迫るものとして傾聴に値する。

第二部では、第一章において「荒地」派の文学史的な位相がマチネ・ポエティックとの関係から再評価され、第二章においては、「リズム」が安易な抒情に直結する陥穽を避け、思想そのものが「リズム」の表出となりうる詩のありようが課題として明らかにされている。また第三章では安西冬衛と雑誌「亞」の活動、また第四章では堀田善衛の日本文化論が取り上げられ、それぞれ鮎川との接点が検討されている。

総じて従来乖離しがちであった鮎川の詩作と詩論との距離を埋めることに意が割かれているため、叙述がやや観念的な傾向を帯びるきらいがあるが、戦争体験のみが重視されがちであったこれまでの傾向に異議を申し立て、同時代に積極的に関わろうとした鮎川の姿を抽出し、現代詩の始発期の可能性に光を当てた点は高い評価に価する。

以上の点から本審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位に値するとの結論に達した。